

## [美術館員随想]

## 展覧会の広報サービスをめぐって

当館次長 成瀬不二雄

美術館で特別展などの催しが終わった直後に、よく次のような声を聞きます。「そのようなよい展覧会があったとは知らなかった。宣伝が不足していたのではないか」と。また、かつて奈良市でシルク・ロード博覧会が開かれていたとき、当館ではこの博覧会に協力して、「シルク・ロードの絵画」という特別展（昭和63年）を開きました。この展覧会は内容が大変充実していましたので、当館によく来られるある観覧者はこれについて、「非常によい展覧会だった。私の知人も大変ほめていた。さぞかし沢山の入場者があつたことだろう」と言われました。これに対して私が、「シルク・ロード博覧会に人を取られ、展覧会も地味で学問的なものなので、それほど人が入らない」とお答えしますと、「それは宣伝が足りないからだ」と言下にきめつけられました。

この二つの意見に共通しているのは、「よい展覧会なのに人が入らないのは、宣伝が不足しているからだ」ということでしょう。しかし、私は「宣伝」については全くの素人ですが、元来、100円お金を掛けたら、105円なり110円なりの収入があるとき、それを「宣伝」と呼ぶのであって、80円とか70円とかの収入しかないとき、それを「宣伝」と呼ぶことはできないでしょう。

もちろん、美術館の展覧会は純然たる文化事業であって、利潤を追求するものではありません。しかし、多くの費用をかけて広報・宣伝しても、僅かの見返りしか望めない場合、それは許されるべきことではないでしょう。

これに対し、新聞、雑誌、放送などのマスコミへの働きかけなど、ほとんど費用のかからない宣伝・広報の手段はあります。この方面

の努力は私どもも常に心掛けています。また、特別展のとき、その担当者が県庁の文化記者クラブへ出向いて、展覧会の内容を説明したり、大阪、神戸、京都などの新聞の美術担当記者に、広報状だけでなく、特別展の図録を前もって送ったりすることもやっています。また、すべての展覧会について、美術教育や研究の専門家、教育機関へも報道していますので、展覧会が開かれたとき、すぐに学生さんを引率して来館される先生方も多く、マスコミ関係者も、今度大和文華館でどのような展覧会が開かれるかについて、知っておられます。

しかし、大和文華館は元来興味を持つ人の少ない日本・東洋の古美術を公開している小規模な美術館です。そして、新聞・雑誌、放送などのマスコミは、たとえ公共事業ではあっても、多くの場合企業ですから、多数の人が興味を持つような記事を掲載し、番組を作ることに関心が深いのは当たり前でしょう。また、マスコミは大得意事業部を持っていて、自社主催の展覧会などを開きますので、それを紹介することに力を注ぐのはこれもまた当然でしょう。そのため、大和文華館で開かれる古美術の展覧会などは、いかに内容が充実していても、地味なので中央紙の美術批評欄などに写真入りで大きく取り上げられたり、NHK教育テレビの「日曜美術館」などで紹介されることが比較的少ないのです。

もっとも、大和文華館は近畿日本鉄道が設立した財団法人ですので、大変幸せなことに、当館で開かれるすべての展覧会のポスターは、たとえ限られた期間であっても、近鉄電車の車内に釣り下げられますし、また近鉄の各駅には展覧会の会期中、ポスターが掲示さ

れています。そして、新聞、雑誌、放送なども、展覧会の題名、会期、及び簡単な内容などは、必ず毎日報道してくれます。そこで、これらによって展覧会についての情報を得て、よく大和文華館に来て下さる古美術ファンは、決して少ないとは言えません。

もちろん、美術館（特に地味な古美術専門館）にとって、これまでこの方面にほとんど関心を持たなかった人びとをどのようにして来館者とするのかということは、取り組まなければならない課題です。当館もこの課題について、それなりの努力はしてきたつもりです。しかし、結局のところ美術館に関心の少ない人びとは、展覧会の情報が新聞や雑誌でいくら目に入り、また放送できこえてきても、本当はそれについて読んだり聴いたりしていないのです。これに対し、大和文華館には、たとえ数が多くなくても、熱心な来館者がありますし、また展示内容によって、たとえば絵画を主とするか、陶磁器を主とするかなどによって、来館者の顔ぶれがらりと変わります。当館にとって、このような「幸福な少数の来館者」があり、たとえ数がふえなくても、へらないうことに、私たちは誇りと喜びを持っています。

個人的な体験ですが、私の深く感じたお話を一つしましょう。数年前、私は延久元年(1069)に描かれた秦致貞筆『聖徳太子絵伝』に関心を持っていました。この絵伝はかつて法隆寺東院絵殿の壁画でしたが、天明8年(1788)に屏風に改装され、明治天皇が明治初年に法隆寺に多額の寄付をされたお礼として、他の金銅仏や工芸品とともに皇室に献上され、太平洋戦争後は国有となって、現在は東京国立博物館に所蔵されています。この絵は現存する最古の聖徳太子絵伝ですが、何分にも900年以上を経た作品ですので、後世の補修や補筆が極めて多く、赤外線写真の助けを借りないと、制作当初の姿を知ることが難しいのです。

ところが、この太子絵伝につい

ては、天明7年(1787)に吉村周圭という画家が原本を忠実に写した模本があり、現在ではこちらの方が障子絵に仕立てられて、法隆寺絵殿の壁にはめこまれています。この模本はいまから200年以上前に作られただけに、原本の当初の姿を想像する上での貴重な資料なので、私はこれを是非ゆくり拝見したいと思っていましたが、狭く暗い絵殿の壁画として公開されていなかったので、なかなかその機会に恵まれませんでした。

あるとき、中央紙の奈良地方版の小さな記事により、この模写絵伝が公開されると知った私は、こおどりし、早速会場となった法隆寺の聖徳会館に駆け付けました。そして、明るく広い場所で、この模写絵伝を十分に拝見し、調べるという幸運に浴したのです。

この限られた期日の公開のとき、聖徳会館にはかなり多くの人びとが模写絵伝を拝観するために集まっており、熱心にそれをみつめていました。そのとき、たとえ普通の人の見過してしまうような小さい記事でも、それに関心のある人の眼には必ずとまること、反対に関心のない人びとにとっては、どのような宣伝でも、眼や耳に入らないということを私はしみじみと感じたのです。

美術館にとって、広報や宣伝によって少しでも多くの人びとに来て頂くことはもちろん大切です。しかし、たとえ少数であっても、その美術館の展覧会を愛して下さる「幸福な少数の人びと」に見捨てられるようなことはしてはならないと私はしみじみ考えています。「シルクロードの絵画」特別展より壁画有翼天使像 ミーラン



季刊 美のたより No.117

平成8年11月14日

発行 大和文華館